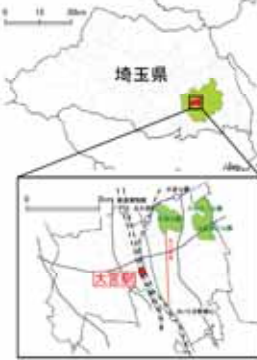


1. 研究目的



埼玉県の大宮駅は県内一の乗客数を誇り、東西には多くの商業施設、交通機関が存在、充実している。また、歴史的な文化である氷川参道などの地域資源も存在しており、独自の発展が期待される地域である。西口は大きな公共空間や歩行者用デッキなどが設けられ、近代的なまちづくりが為されているのに対し、東口は建物が雑然と立ち並び、昭和の雰囲気色が濃く残ったヒューマンスケールのまちで、路地が生き残されている。しかし、建物の老朽化問題や、利用者に見合った歩行空間も十分に確保されておらず、様々な問題が存在している。本研究では、それらの問題の背景を読み取り、そこから生じる問題を複合的に解決していけるような設計提案を行う。

2. 大宮駅の開発状況

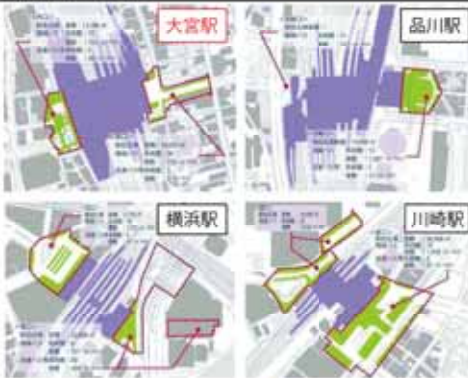


東口における利用者は年々減少の一途を辿っており、百貨店などの駅外商業施設の衰退が目立ち始めている。図1から分かるように、1981年から早い段階でまちづくりや再開発を行ってきた西口に対し、東口はバブル崩壊の影響などから再開発に遅れが目立ち、雑然と密集した建物が多く存在しているため、東西でまちの様相が大きく異なっている。



図1 大宮駅東口、西口、駅ナカ、さいたま新都心におけるまちづくり変遷図

3. 問題提起



大宮駅は日本において、多くの路線が乗り入れる有数のターミナル駅の一つであるが、他のターミナル駅と比べると、大宮駅東口における歩行空間（駅前広場）は圧倒的に少ないことが分かる。

歩行者にとっての空間が無いことが、まちへ出ようという意識を失わせているのではないだろうか。



4. 対象地について



■対象地
すずらん通り沿い地区
(駅から大門町まで)
■対象地面積
3942.2㎡



駅前に位置するすずらん通り地区とその沿道を対象地区として選定する。この地区は商業地域となっており、多くの飲食店が密集して立地し、特徴ある商店街となっている。すずらん通りは通過交通としての利用も多く、歩行者数に合った幅員ではないため、混雑した動線となっている。現在施工中の大門町再開発の影響から、現在施工中の大門町再開発の影響から、駅からこの地区内を通過する人の数が更に増加すると見込まれる。そこで、現在の魅力を残しながら更新するとともに、歩行者動線を強化、快適化するための計画を作成する。

5. 計画概要

5-1. 路地境界の再生と継承

建物をセットバックして歩行空間を設ける手法では、この大宮駅東口に見られる特徴（地域性）が失われ、西口と相違のないまちになってしまう。そこで、この地区最大の特徴である路地のある飲食界隈を再生するとともに、来訪者が憩い、まちを楽しく回遊しながら歩ける空間を新たな機能として設けていく。

5-2. 路地境界を構成する要素

■歩行者路幅員

地区内の密度感を表す要素の内の一つと設定。この地区の幅員はすずらん通りで3m、さくら小路で1.5m程度しかない。他の通りと比べても明らかに狭く、この地区独特の路地境界を形成している最大の要因ではないかと考える。

■間口幅

すずらん通りで見られる間口8m程度の建物群が生み出す連続した雰囲気が地区の多様性や賑わい形成に寄与している。

■建物間の距離（隣棟間隔）

この地区の隣棟間隔は短いところで30cmと狭く、地区内の密度感を形成する上で必要不可欠な要素である。

6. 提案

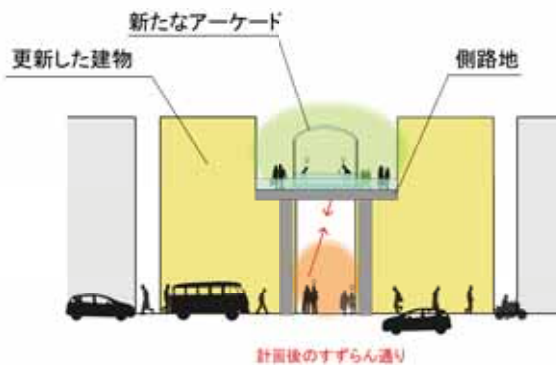
これらの現状を踏まえ、歩行者動線を2階レベルの7mを境に、低層と高層で分離し、混雑を緩和する。低層部分にはこの地区の特徴である路地境界を残し、高層部分には、来訪者が快適に過ごせるカフェや宿泊施設を設け、歩行者のための側路地を設置する。側路地を駅、対象地区、大門町につなげることで、歩行者が動線として利用する価値が高まる。路地境界を壊すことなく建物を建替え、新しい機能を高層部分に設けていくことで、低層と高層で様相が異なる魅力のある地区にしていく。

7. 設計概要

大門町再開発事業によって、増加する歩行者数から受ける動線の混雑を緩和するために、道路拡幅を行えば、路地界限を形成する上で一つの要素である密度感を壊してしまう。密度感が失われた通りは、境界性が失われ、この地区の特徴を壊し、通過交通の利用が目立つ面白味のない通りになってしまう。



そこで、現在のアーケードの高さ7mを基準に、駅から伸びるデッキを通り沿いに設け、歩行者動線を二分化する。地区の特徴である路地界限を壊さないために、境界を構成する要素を取り入れながら、既存の建物を更新していく。上の歩行者はデッキを側路地として歩き、通りを見下ろせば、軒を連ねる飲食店と人々の賑わいを見ることが出来る。下の通りの歩行者は、賑わう飲食店に両側を、側路地の歩行者と新たなアーケードに上部を囲まれる特徴のある空間となっている。



8. 全体計画



低層部分と高層部分で機能を分離しているため、特徴のある空間となっている。この地区が、大宮駅と大門町再開発地を結び、来訪者にとって動線という機能だけでなく、憩える空間ともなっている。

駅を出ると、来訪者が一休みできるオープンカフェがあり、少し奥に進むと、可動式のイスとベンチ、小売店が備えられた広場がある。さらに奥に行けば、既存の角井ビルをリノベーションしてレストランやブティックの機能を持たせ、隣には東口には少ない宿泊施設を設けた。機能を二分化することで、これまで同様、路地界限を残しつつ、新たな機能をこの地区に付け加えることが出来る。

9. パース



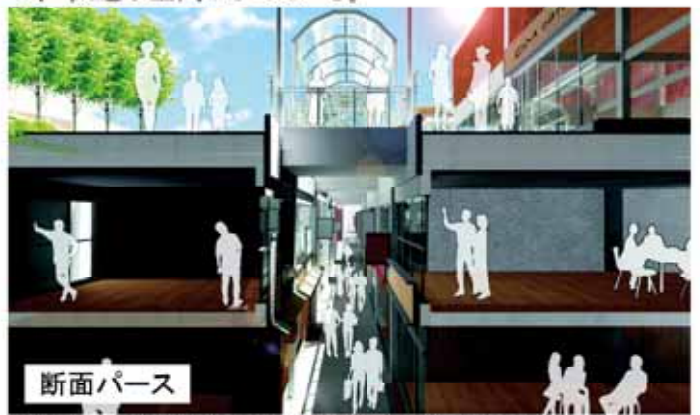
通りから上を見る

路地界限の雰囲気が残り、上を見上げれば側路地を横切る歩行者と新しいアーケードを見ることができる。



側路地と OM cafe

新たに作ったデッキの上では、オープンカフェで一休みすることができる。また、動線の混雑を緩和したことによって、快適な空間となっている。



断面パース

通りを見下ろせば軒を連ねる飲食店を見ることができる。人々の視線が交差することで新たなアクティビティを生み出すきっかけとなる。



小売店と広場

可動式のイスとベンチが様々な憩い方を生み出す。